

① 次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。

次の一節は、皇子が、その①冒険談のうち、②たんなる航海の末にようやくのことで探し当てたという、蓬萊山の様子を語る部分である。

文語文

これやわが求むる山ならむと思ひて、(1)さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐるして、二、三日ばかり、見歩くに、天人の(2)よそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鏡を持ちて、(3)水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と(4)問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。(3)その山のそばひらめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたり、照り輝く木ども立てり。その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、(4)のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

現代語訳

これこそわたくしが探し求めていた山だろうと思つて、(うれしくはあるのですが) (1) 山の周囲をこぎ回らせて、二、三日ばかり、様子を見て回つていきますと、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、



銀のお椀を持って、水をくんでいきます。これを見て、わたくしは船から下りて、「この山の名はなんというのですか。」と尋ねました。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。これを聞いて、わたくしはうれしくてたまりませんでした。

その山は、見ると、(険しくて) 全く登りようがありません。その山の斜面のすそを回つてみると、この世には見られない花の木々が立っています。金・銀・瑠璃色の水が、山から流れ出てきます。その流れには、色さまざまの玉でできた橋が架かっています。その付近に、光り輝く木々が立っています。その中で、ここに取つてまいりましたのは、(たいそう見劣りするものでしたが、) 姫が (4) と思ひ、この花の枝を折つてまいりましたのです。

問題

ところがくらのちの皇子が得意げにこう語つてるところへ、玉作りの匠たちが押しかけてくる。千日(5)あまりも働かされながら、まだほろびがもらえない、どうにかしていただきたい、という匠たちの訴えで、(5)皇子の策略はいつべんに破れてしまうのである。

ほかの四人も、あるいは大金を使い果たし、あるいは危険を冒して大けがをするなど、目ざす品物を手に入れることができず、求婚はすべて失敗に終わった。

このように人々の心を奪うほどの美しさを(5)そなえたかぐや姫を、時の帝は、ぜひ宮中に迎え入れたいと、たびたびお召しになったが、かぐや姫はそれにも応じようとしない。

そうしているうちに、さらに三年の月日がたった。その春の初めから、

かぐや姫は、月を見ては嘆き悲しむようになる。秋になってその嘆きがいつそう大きくなるのを見かねた翁が、わけを尋ねると、

「わたしは、実は月の都の者です。わけあつて人間世界に参りましたが、八月十五夜には、月に帰らなければなりません。」と、涙ながらに打ち明けた。

いよいよ中秋の名月の夜、帝は、二千人の兵士を遣わして翁の家を守るようお命じになった。しかし、月の都の人々に対しては、兵士たちも全く無力であった。かぐや姫は、翁には着ていた衣を、帝には天人の持参した不死の薬を、それぞれ手紙をそえて残し、人々の悲しみをあとに天に昇つていつてしまった。

帝は、かぐや姫から不死の薬を贈られていたが、かぐや姫のいないこの世にいつまでもとどまる気がしない。そこで、

「どの山が天に近いか。」とお尋ねになると、ある人が、駿河の国にある山が、都からも近く天にも近いとお返事申し上げたので、その山に使者をお遣わしになった。

文語文

御文、(6)不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。そのよううけたまはりて、(7)土どもあまた(8)具して山へ登りけるよりなむ、その山を「ふじの山」とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。

現代語訳

帝は、お手紙と、不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やすようにと、



御命令になった。その旨を承つて、使者が兵士たちをたくさん引き連れて山に登つたということから、その山を「土に富む山」、つまり「ふじの山」と名づけたのである。その煙は、いまだに雲の中へ立ち上っていると、言い伝えられている。「蓬萊の玉の枝——」竹取物語「から——」より。

光村図書版「国語1」113～119ページ

問1 線①～⑥の漢字の読み方を平仮名で記し、平仮名は漢字に直しなさい。 [各2点]

① ぼうけんたん

② げんじ

③ しやめん

④ ねん

⑤ 持持

⑥ のぼ

備 (三三三)は生まれをもち、身につけてる

残念

余はねまよる。画と画は離さないように。

問2 線②③④の言葉の読み方を、現代の仮名遣いに直してすべて平仮名で書きなさい。 【各2点】

教科書
44 121

① よそおい
② とう
③ よこと
④ いったえ

ア段十う(む)は「同じ行のオ段十う(ま)音」と読む。
ウ段十う(す)は「同じ行のオ段十う(ま)音」と読む。
まうす(も)うす(甲)

問3 線(1)「さすがに恐ろしくおぼえて」を現代語に訳しなさい。 【4点】

「ヤマリ」
「さすがに」
「恐ろしく」
「おぼえて」

「おぼえ」の言、切りの形は「おぼや覚ゆ」です。
覚ゆ「自然に思われる感じられる」
現代の「記憶する」とは違う意味が使われていることに注意しよう。

問4 線(2)、(3)、(7)、(8)は、だれの動作ですか。それぞれ後の「か」ら選んで記号で答えなさい。 【各2点】

文語文は、主語や主語を示すがや、は、などがよく省略されます。
補いは、読みましょう。
(7)は現代語訳と照らし合わせてすぐわかります。
(8)「水をくみ歩く」

(2) 「水をくみ歩く」
(3) 「その山のそばをめぐれば」
(7) 「具したまふ」
(8) 「具して」

帝の命を受けて、王もさくさん引き連れて山に登ったのはだれですか。
イ
エ

ア	かぐや姫	イ	くらのちの皇子
ウ	帝	エ	天人のよそほひしたる女
オ	使者	カ	土とも

問5 線(4)「のたまひしに違はましかば」とありますが、

① 現代語訳に直した場合、次の⑦⑧の□にあてはまる字数の言葉を考えて書きなさい。 【各3点】

④ 去邊 ⑤ ちや ⑥ たもの
⑦ いたはいけなだらう(と思ひ)

現代語訳を見よう。
② そう思った皇子は、どのような花を折ってきたと言いましたか。
次の「□」にあてはまる言葉を現代語で書きなさい。 【4点】
・ほかの花に比べて
・見劣りする
・「非常に」
現代では使われないが、文語文ではよく用いられる重要語句

③ くらもちの皇子は、どのような意図(考え)でこのように言ったと考えられますか。考えて書きなさい。 【5点】
「あたかも」
「かんがえて」
「恥」
「意図」
「本物の花の枝だと思わなうと」
「ひめのことさ」

New Rainbow
48 解説 14.15
「意図」について答えるのだから、文は「……意図。」と結びます。
「たいそう見劣りするもの」で「か」と「わ」と悪く書くことで、むしろ本物らしく思わさうとさせるね。
くらもちの皇子の注意、技巧な話術でした。

問6 線(5)「皇子の策略はいっぺんに破れてしまふ」とありますが、その理由を教科書の言葉を使って考えて書きなさい。 【6点】
千日余りも働かされたのに、まだほうびをもらえていないと、玉作りの匠たちが許えにきたため。
どう、うき、匠たちは許えにきたのか、状況も大切なポイントです。

問7 線(6)「不死の薬」について、現代語訳に「帝は」……御命令はな、とあります。 【5点】
① 帝は「不死の薬」をどうしましたか。考えて書きなさい。 【5点】
「飲まず」
「手紙といっしょに」
「燃」
「燃」

不死の薬を、一口も飲まなかつたという事実が重要です。

